

---

# CHAIN JUDGMENT

杉崎 ゆう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CHAIN JUDGMENT

### 【Zコード】

N7731Y

### 【作者名】

杉崎 ゆう

### 【あらすじ】

シスター服の女。カーテナ・ハーンに急に襲われた、悲しい吸血鬼、サングレイス。

カーテナの好奇心旺盛、唯我独尊に巻き込まれ。前途多難な主人公サングレイス。彼の安息は、来るのだろうか？

遺跡調査が趣味で、お宝大好きなヒロインこと、カーテナが送るファンタジー世界をお楽しみください。あ！グレイその大鎌に触っちゃ大変なことに・・・。それでは本編スタート

## 出会い

服装は、袖とスカートの長いシスター服。そして体中に鎖を巻いた格好。手には、身の丈と大差ない大きな十字架のような剣。女がそこにいた。髪は、腰まで長く一本にまとめた金髪。目は、空のように透き通った蒼色。そんな女が、なぜ？ サングレイスを襲うのかサングレイス本人は、全く理解不能であった。

強い・・・こいつ人間か！ 全く歯が立たない。隙も見せず、淡々と俺に攻撃してくる。

「お前は何だ。いつたいこの館に何しにきた！ 意加減しろよ、俺はお前なんかに恨みを買う覚えもないし、初対面の筈だぜ！」

「そんな細かいことは気にしない気にしない！ 伝説級の吸血鬼がいるつて町の人聞いてさあ～ これは、一目見なきやと思って態々この雪山まできたの。序に、私が貴方こと、審判を下してあげるわ～」

なんだ、神様気取りか？ たちが悪いぜ！」この女。

「俺は、のんびり家で本を読んでるのが好きなんだが？ 大体内の親は、留守中だ！ いい加減帰れ」

現在、館に暮らしているのは、長男。サングレイス一人であった。父と母、ついでに妹は、ただいま旅行中で、留守にしている。一週間は、帰って来ない。

「それに只今仲間（助手）を探します。最近遺跡調査が、大変で・・・ここらで、良い仲間を探そうかと

「悪いが、遺跡調査なんかに興味は無い。態々ご足労だつたなシスター。きっと何時か良い仲間は、見つかるさ。」

会話をしながら、淡々と死闘を繰り広げ、苛立ちを隠せないでいる吸血鬼。いい加減殺すかと考えたその時、女の鎖から強い魔力を放ち始め。鎖がサングレイスを襲つた。

「そろそろ斬り合いも疲れたし、これで決めるね！」

襲つてくる鎖を素手で叩き衝けても物ともせず。霧化して、迷れようとしたが鎖には、効かず。捕まってしまった。

「なんだこの鎖！　どうなっているんだ。力が全く入らない？・・・」

「捕まえた。それでは、審判を下します。チエーンジャッジメント」

女がそう叫んだ瞬間。サングレイスを巻きつけてる鎖が蒼い光を放ち。サングレイスに衝撃を与え。サングレイス意識を飛ばした。

## 災難は続く

氣絶した、サングレイスを見ながらカテナは、満足したような面持ちで見ていた。

「想像以上に力があるね！ しかも審判は、吸血鬼を選んだ。これは見つけもんね。」

『CHAIN JUDGMENT』は、魔力を込めながら、念じれば鎖が審判を下してくれる。今回念じた内容は、カテナのパートナーであるかの問い合わせだつた。 審判は、サングレイスを選んだ。しかも、超が付くほどの中傷だった。 幸先の良いスタートを歩み始めていた。

「早速、契約の指輪でもはめよ」

そそくさとカテナは、指輪をはめて、呪文を唱え始めた。

「我、汝の命の灯火が終わるまで、永遠に歩むことを誓う。 我、カテナ・ハーンが命ずる」

呪文を唱え終えた瞬間。 指輪が光り出し、お互いの手の甲にローン文字が刻まれた。

「ふ〜 これで終わった。 少し疲れたし、君の家で休ませて貰うよ！」

サングレイスを鎖で空中に浮かせながら運び。 カテナは、館に向かつた。 館に着いたら、鎖に念じながらサングレイスの部屋を探し、ベットに寝かせた。

その後カテナは、館の中にある書物を読み漁り、久しぶりの入

浴を満喫した。

「吸血鬼は、本当に水が苦手なのね。まさか紅茶のお風呂に入れるなんて夢にも思わなかつた。」

カテナは、お風呂を鎖の要領で探し、見事お風呂を発見した。  
しかし、シャワーにしても、湯船にしても純粹な水は、一切出なかつた。しかしカテナ自身、そんなに違和感無く入れてた。

風呂も満喫し、圧しく袋の中身をダイニングで整理していくたら、サングレイスが起きてきた。

「人の家でお店を広げるな。何だこの早々たる品は？」

「へつへつ 私の遺跡発掘により、手に入れた宝物よ。言つとくけど、あげないわよ。絶対に！」

そんな会話をしながら、長刀を抱えながらカテナの背後に近づき、一太刀浴びせようと切り掛けたが、長刀の刃が近づく境にカテナが命令をした。

「ストップ！」

「ちつ

「あまいあまい。君を手名づけようとする輩だよ。少なくとも君と同程度の力が無きや勤まらないよ」

「はあ・・・ 分かったよ。家の家訓道理。俺は、素直に従いますよ。」

サングレイスの家名。シルバー家は、己を打ち負かすことがあれば、そやつを殺すか？もしくは、生涯一生忠義を尽くす決まりであつた。それは、男女年齢は問わず。その家で生まれた者、全

員に化せられた家訓であった。

「俺の名前は、サングレイス・シルバー。あんたの殺るか、忠義を尽くすか、俺が見定める。俺を幻滅させるなよ。」

「いいよ別に？ そんなに怯えなくても・・・私が可愛がつてあげるから。」

「ふつ 言つてろ」

「でわでわ。私の名前は、カーテナ・ハーン。カーテナでいいわよ。グレイ！」

お互い自己紹介が終わり。グレイが今後の事を考えながら紅茶を飲んで、いまだに宝物を整理しているカーテナに聞いた。

「いつ出るんだ」

「明日には、出発する予定。ここから変の近くにある古代人の神殿に行く予定。」

「それってもしかして・・・ホワイトドラゴンを祀つてる竜人族の里の事か？」

「そうそう。話が早くて助かるわ。」

「そう簡単に見つかるかな？不安が過ぎるのだが・・・」

「大丈夫よ。何とかなるって！ 実際遺跡調査、発掘なんて危険がいっぱい出し。貴方の家に来るのも人間の私には、十分辛い道なんだから。いまさら危険の一つや二つ気にしてたら、切りが無いわ」

「それもそうか。」

カーテナ本人が気にするならともかく、グレイ本人が気にしてもしないがないと思い。カーテナのお宝を眺めてた。

金銀財宝に、不陰氣のよろしくない壺や鏡。剣や矛などが沢山あるのであった。そんな品々を眺めていたら、一際目立つ変わった武器見つけた。徐に近づき、グレイは、手に取ってしまった。

「でかい鎌だな。初めて見たよ俺。小説で読んだことがあるぞ・・たしか・・死神が魂を狩るときに使われる物と書いてあつたな。」

「えつ なに? なんか言つた? つてええええ グレイ! それには(大鎌)触つたら。」

カテナが慌ててそれを静止するもすでに遅し。グレイは、完璧に握り。素振りをしているのであつた。

「別に取りはしないよ。大体カテナは、命令すれば俺は、逆らえないだろ。」

そんな悠長な態度でいたグレイ。そしたら、黒い影が大鎌から出てきて、グレイの体を包みこんだ。そんな姿を眺めながら、カテナは、合掌し哀れみの視線でグレイ見ていた。30秒ぐらいだろうか、黒い影がグレイが晴れたのは。驚愕だったのだろう。グレイは、目をぱちくりさせ。カテナの哀れみの視線を感じ、声をかけた。

「ど んゅよ!」

あれ声がうまく出ない。どうしてだ? なにが起つた?

そんな思考をめぐらしてゐる最中にカテナが思い口を開いた。

「今は、一言も喋らずに落ち着いて聞いて。グレイが持つてゐるその大鎌の名前は、虚構の大鎌。その能力は、持ち主の性別を事実と異なる変化を与える能力。別名、神の悪戯」

説明を聞き終えるやいなや、グレイは、大鎌を投げ捨て、姿見に直行した。グレイの部屋に姿見などは、無く。妹の部屋に来ている。そして見たことも無い女が青い顔してそこにいた。身長140cm 小柄で、銀色の床ギリギリのロングヘア。目は、血のように紅に輝いていた。

現実を直視した後、光の速度でカテナに抱きつき涙ながらにシスター服を引っ張つり、声が出てないのに口をパクパクさせて、縋り付くのであった。

「グレイ！ ちょっと落ち着いて。命令で喋らないようにしてるから、なにを言つてるとか分からぬから。まあ言いたい事は、何となく分かるけどさ・・・」

「なんなんだこれ！ 早く戻せ！ マジで簡便してください。・ ずっとこのままなんて絶対にやだ。 お願いだ。 何とかしてくれ。」

「元に戻す方法は、天界に行つて。 ふざけた製作者を見つけないと無理だわ。 その呪いは、死神が作ったのだから。」

しばらくそんな話題の押し問答をやつた後、落ち着いたのか、落ち込んだのか、グレイが椅子に座り、涙を出し尽くしたのか、明日の方向を向きながら佇んでいたのであった。このままじゃ話が進まない、いや話ができないのでカテナは、グレイに優しく頭をなでながら話した。

「今おままだとうまく声でなくて、喉を駄目にすると想つたから、命令で声を出さなくしたから、命令を解除するね。 ゆっくり声を喉からだしな。」

カテナの思いやりが伝わったのか、ゆっくり頷き。 言つ通りに

声を出した。

「あ・・・あー。こんな・・かんじでいいか?」

「良いよ。そんな感じ。男から、女はでは、出し方が違うから。なれてないうちは、ゆっくり喋りな。」

グレイにとつて災難が起つてしまい自分の身体に慣れるのに一週間。つまり7日も費やしてしまった。7日も経てば色々と理解した。まず着るもの。これは、以前着てた服が全くサイズが合わない・・しかも、男物を頑なに拒んだカテナの命令で着るようになし。今では、羞恥心無くなつた。初日は、それでも辛かつた。しかし今では、なんとか着れたのであつた。

後は、お風呂の入り方などを重点的に仕込まれたのであつた。特に五月蠅かつたのが髪の毛の洗い方であつた。そんな荒い方なら洗わないほうがきれだなど、綺麗な髪は、大事にしなさいなどかなり五月蠅い。

吸血鬼の能力は、男の時と同じ能力が発揮できた。霧化・再生・吸血・狼化・そして飛行。中でも飛行速度は、男の時よりも速く動けて、驚いた。これは、ちょっと嬉しかつたりして。

そして、便利アイテムも入手できた。そつ・・しの身体の原因。大鎌である。なんと必要な時に念じれば、直ぐに手に届く。そして必要ないと念じたり。手から離したら、消えるのであつた。しかも切れ味が抜群。正直切れないものは無いのではと想つぐらい素晴らしい出来だ。正直あの呪いさえなければ、純粹にほしいと想つたね。

暫くそんな生活をしていたら、ある日突然玄関の扉を開き。帰つてきたのであつた。

「ただいま～お兄ちゃん！帰ってきたよ～」

そんな妹の声を聞きながらなんて説明をするか考えるグレイであった。

本人以外は、別に問題ない。

和やかな視線で、息子。今は、娘になつた自分たちの愛の結晶を見つめ。暢気な会話し始めた。

「母さんやい。グレイが暫く見ない間に可愛くなつてしまなあ～私は、誇らしいよお実に。」

「そうねえ貴方。まさか、あの引きこもりで、根暗なグレイがここまで可愛くなるなんてえ。私に似て綺麗だし、申し分ない娘だわ。早く嫁の貰い手でも探して、結婚でもさせようかしら。」

親の発言に納得ができないでいる、グレイ。尤もグレイが男だろうが女だろうが、問題は、そこでは、無かつた。親は、グレイに早く結婚してもらい、親の跡を継いで、立派になつて欲しいのであつた。そんな状況に苛立ちを隠せないグレイは・・・

「父さん。お母さん。俺がこうなつた原因とか聞かない訳。しかも俺がグレイだつて、最初から分かつてたみたいだし・・・父さんの力なら何とかできないの？」

「そのままで、良いではないか？男でも女でも私たちは、お前の家族だぞ。胸を張つて生きろ。」

想像道理で、大して気にしては、いないのであつた。そんなことより。グレイの隣にいる人間の女。カテナのことが気になつていたので、娘（息子）の話を適当に切り上げて、カテナに質問した。

「しかし・・良く息子に契約が出来ましたね。正直驚いていますよ。グレイは、決して弱くないはずですよ。」

「そうですね。息子さんは、弱く無いけど、考えが甘いですね。今迄強敵と廻り会わなかつたとお見受けします。そのお陰かな

んとが勝てました。」

「そんなご謙遜をなさらずとも。息子が油断していたと言え。それは、グレイ本人の未熟。自分で何とかするでしょ。したがって、我々は、貴方に危害は加えないと約束します。それに・。」

「グレイお姉ちゃんだ。小さい頃から両方欲しいと想つてたの。カテナさん。ありがとうございます。夢が叶いました。」

「ふふ。 そんな御礼を言わることは、してないわ。それに貴方のお姉さん（お兄さん）が自分から進んで、なつたのだから。私何も。」

「そつか。 お姉ちゃん。 私の為にありがとうございます。これからは、気兼ねなく一緒にお風呂は入れるね。」

まさかの妹の爆弾発言により、グレイの親＆カテナから変な誤解を受けたのは、言つまでも無く。今後のグレイの対応についてなにせり楽ししそうお話するのだった。

「俺は、レレナが喜んでくれるなら・・・嬉しいよ。」

涙を堪えながら、優しく丁寧に、レレナの頭をなでた。傍から見れば、まさに実の姉妹のように見えた。当の本人の氣も知らずに。

「といひで、出発はいつにするのか決まったのかね？」

「ああ。 予定は、もつと早く出発する予定だったからな。 父さん達の顔も見れたし、明日には、行つてくるよ。」「お兄ちゃん。 帰つてくる時は、お土産よろしくね。 楽しみに待つてるから。」

妹は、お土産をおねだりして、満足した様子。やれやれと想いながら、グレイは、出発の準備をするのであつた。その日の夜は、一段と晴れていた。雪は降らず。星達は、輝き。澄んだ空気。これから、起こる事に不安を覚える自分とは、裏腹にそれがまた、美しかつた。

そんな光景を眺め。最後にグレイは、持ち物を確認するのであつた。持ち物は、長刀・本・衣類（事前に母親が準備した服多数。）準備が終わり。ベットに横になり。やわらかいベットを味わいながら、寝たのであつた。

翌朝、雪山とあつて木の陰などは、青く輝き。美しく迎えてくれた。吸血鬼は、暑さ寒さは、全く影響なく。両親たちが、暑苦しいより涼しい方が見た目も好きみたいで、此処に館を築いたそうだ。尤も、やたらと人間やその他の化け物にも襲われることの少ない静かな場所を選んだのが、大まかな理由であった。

グレイの服装は、両親達にもらつたカーテナ同様シスターの服をもらつた。何でも同じシスター服なら怪しまれないで、澄むから母親が昨日夜なべして4着程作つたのであつた。昨日用意した、妹の服は、黒のワンピースで、レース・フリルを基調としたのしか無く。それを3着ほどもらつたのであつた。しかしそれだけでは、女は、足りないとの事で、急ぎ作成したそうだ。

カーテナのシスター不服とは、違い。袖、スカートの部分は短く。背中に羽が出せるように開いている使用だ。昨日荷物を準備する前に、色々母親から身体の隅々まで、調べられたのであつた。

ちなみに、グレイの羽はカラスの様な漆黒で羽毛状の羽である。使いたい時は、出し。使わない時は、しまえる便利な者だ。しかし、それでもしないと、寝る時に不便があるので色々と助かつ

てる。

だつてあれじやない。ベットが羽だらけになるのは、勘弁。

朝食を食べ終え。出発の時間がやつて來た。両親一人に、妹が寂しそうにこちらを見ているのであつた。それもそうだ、妹は、まだ20歳。俺は、178歳。常に兄のそばにいた妹にとつては、割と深刻な問題だつた。グレイ本人は、決して自ら外へ出ることは、無く。常に家で、本を読んでもござしていたのであつた。だから兄に相手をして貰つてた今迄の生活は違うのだ。そんなグレイが、この館から、旅に出るのは、今まで無く。二十歳の妹。レレナにとつて寂しい心情だつた。

「いつてらっしゃい。絶対お土産忘れ無いで帰つて来てね。何かあつたら時々連絡するね。だから、お兄ちゃんから連絡してね。約束だよ。」

「ああ。分かってる。お前もお母さんと父さんに心配懸けるなよ。それに暫く俺の血は、吸えないだろ。飲みな。」

レレナに向かつて白い細腕を差し出した、グレイ。レレナは、嬉しそうにその腕を掴み、動脈の太い部分に口をつけ。血を吸い出した。その笑顔は、年相応に美しかつた。

「えへへ。やつぱりお兄ちゃんの味だ。これは、変わらないね。これからは、寂しいけど、カテナさんと契約したみたいだし。お兄ちゃん自身は、自分の身体を元に戻す為に行くんだもんね。がんばってね。お兄ちゃん。」

「お前も元気でな。それじゃ～父さんお母さん行つてきます。」「行つてらっしゃい。」元に戻れなくても、いつでも戻つて

きな。父さんは、お前が娘で構わないからな。むしろ娘がいいかも。」

「ちょっと貴方！何考へてるの。今のグレイの姿に変な氣でもしたのかしら（怒）ふん！」

「やつ・・それは、お前の若い頃に似ていてだな。いろいろと想つ事があるんだよ。私は、お前だの夫だから。そんな顔するな（涙）」

実は、グレイの姿は、今の母親と大して変わらないのだ。少し今は、母親のほうが大人びているだけである。ちなみに妹とは、鏡で写したように同じであつた。ただし黒髪なだけ。父親譲りの黒髪が遺伝したのである。

「じゃあ行つてきます。俺からも何かあつたら連絡するか。」

息子が出発したのに、いまだに口論をしている夫婦であった。ただ一人。兄の旅立ちを心配してたのは、レレナだけであつた。

## 空腹は、最大の敵。——「れ生き物全ての共通。

久しく外に出歩いては、いなかつたサングレイス。始めは、心地良い気分で、自然を満喫していた。

澄んだ空氣。純白の雪。緑が際立つ森林。大きさから遠い時代のなごりを感じさせてくれた。

「景色が綺麗だな。今迄、外に出ることが殆ど無いから、こんな気持ちちは、久しぶりだ。」

「そうだったの？ 最初の見た日は、活発そうだったけど。」

「それは、父親があんまりダラダラしている、俺にいい加減キレて、稽古を付け始めたからだろ。」

「へえ～ 稽古つて、今あんたが肩に担いでる長い棒みたいな剣の稽古？」

「ああ。ちなみにこれは、剣じゃ無い。刀だ。ひがしかた 東方にある武器だそうだ。父さん達が若い頃、新婚旅行で行った国にある得物だよ。」

「ちよつーちよつと？ 何で私が来た時にそれを使わなかつた訳？ あんた！私と戦つてる時、素手じやない。私をバカにしてる？」

「正直あそこまで、戦えると思つてもみなかつたものでね。しかも負けるとは・・・・・」

サングレイスは、素手だけで、カテナと戦い。何とか CHAI N JUDGMENTで勝てたと言う。もしも、その刀という物で、戦っていたのなら、結果は、判らなかつた。

勝負。試合。戦いなどは、一瞬の迷いが命取りになるのは、よくあること。むしろ相手がカテナだから一命を取り留められたのだ。もしも、殺し目的でそのような失態だつたら命は、なかつたであろう。そして、その事にシルバー家は、全員カテナに感謝をしていたのであつた。

「ところで、目的地の場所に近づいているのか？ 縛度も幾度も雪だらけだぞ。いい加減飽きたのだが。」

「そんなこと言つたて、今日出てすぐに見つかる訳は、無いのよ。本の世界な訳じや無いのだから盲い話があるかつての！ そんな小つちやい心じや大きく慣れないからね！」

「別に俺は、大きくなりたくもないのだが……まあ・・すまんな。気が使えなくて。」

「ふん！ 分かればいいの。分かれば！ あんたは、私について来ればいいの。おわかり！」

「・・・・・」

唯我独尊の絵に描いたような態度で、少々戸惑いの色を隠せないでいるサングレイス。身内以外にこんな経験がなかつたので、慣れてないが、どこか嬉しさも感じるのだった。

一〇日。 雪。

一一日。 雪。

一二日。 雪時々吹雪。

一ヶ月。 雪時々晴れ。 または、吹雪。

そんな、旅路にそろそろ食料が底をつき始めたカテナ。 想像異常に厳しい旅に限界を感じ始めたサングレイス。 そろそろ限界に来たのであつた。

「カテナ・・・ いつたい何時付く予定だ？ そろそろ見つかっても良いじゃないか。」

「いやー 全然見つからないね。 ダウジングでは、こっちであつてる筈なんだけど・・・」

「大丈夫なのか？ そのダウジング・・・」

「当たり前よ。 この力のお蔭で、グレイを見つけたのだから・・・間違いないわ！」

「でも、『』一週間ぐらい。 山を登り下り。 崖をこえ。 谷をこえ。 いろいろな道を来たのだが、一向に目的地にたどり付けるか心配なのだが。」

「大丈夫だから。CHAIN JUDGMENTは、ちゃんと方向を示してるのでだから。グレイは、心配しないで、私に付いてきなさい。」

不安が無いと言えば嘘になるが、グレイ本人は、主人の言うことに逆らえる筈もなく。輸血パックの残量を考えながら歩くしかないのであった。

三ヶ月目突入した辺りから、異変が起きたのであった。なんとグレイが寒がりだしたのだ。始めの頃は、薄着のシスター服でも平氣だったのに、今は、カテナの黒いトレンチコート。背中には、十字架が描かれているのを貸してもらつてる状況だ。それでも、やはり寒いのか顔色が悪くなり始めたのであった。

「ちょっと大丈夫？」

「大丈夫だ。ちょっと疲れただけだから・・・一二三日したら、すぐ元気になるから。」

「本と大丈夫？ 寒かったら、言いなさい。服なら他にも有るから・・・それに、疲れたなら、焚火でもして、どこかで休めるわ。」

「そうだな・・・その時は、言つから・・・大丈夫だよ。」

不安にさせない為にグレイは、言つたが肉体は、もう既に限界を超えていたのだった。 それもその筈、グレイは、一ヶ月前から、血を一滴も飲んでないのであつた。 そして、吸血鬼の能力も使えなくなり始め、寒さも感じ始めたのだ。 こんな状況は、一度も無く。 グレイ本人は、知らないでいたのだ。

その日の夜は、何時も後退で、見張るが顔色が悪いと言つ事で、さつさと寝かせたのであった。

これは、結構やばいかもしないわ。 ただでさえ、白い顔なのに、白さがましてるわ。 何が原因かしら・・・ 全く検討もつかないし。 どうしよう・・・

苛立ちと不安の入り混じった眼差しで、グレイを見つめ。その日の夜は、終わった。

次日の日、グレイの荷物を代わりに持ち（刀は断固拒否した。）雪山をひたすら歩き続ける一人だつた。荷物といつても、見た目は、ただの茶色い革製の肩掛けバックだ。中身は、カテナ同様圧縮できる使用だ。しかし、今は、それでも動きを鈍らせるので、代わりにカテナが持つたのであつた。

「この辺視界が悪いから注意しなさい。」

「そうだな・・・」の吹雪じや～お前から逸れたり迷子だ」の  
か、今の場所すら分からねえし。 気をつけて行くわあああああ  
ああつああああああああ  
「

「え！ つてグレイ！ グレイイイイイイイー」

足場が抜けて、下に落ちたのであった。グレイの姿は、ビックリ無く。ただ大きな穴が底に空いていたのだった。

「グレイが落ちちゃった。どうしよう。早く助けなきや。」

突然おきた出来事に混乱し、慌てるカテナであった。

## アンダーグラウンド

吹雪の中、竜人族の神殿を探してた途中で、大きな穴に落ちてしまつたグレイ。 カテナと逸れてしまつたグレイは、何処から来たのか分からぬような状況にいたのだ。

「いてて。 此処は、何処だ？ 洞窟かな。」

グレイが落ちた場所は、誰かが意図的に作られたと思われる、洞窟であった。 周りを見渡すと、岩が崩れたのか、一つは塞がれていた。 もう片方は、何とか無事なようだ。

「カテナと逸れたな。 周りを見ても道は、一つしかないから、恐らくカテナの所には、戻れないだろし・・・このままいてもしようがないから先に進むか。 刀は、運よく失くさなかつたしよかつたな。」

そんなに大切にする、グレイの刀は、レレナが15歳の頃、家族旅行でのお土産で買った物。 グレイの誕生日の日に渡された、プレゼント。 父親のお下がりで、壊したらよく怒られると事が多かつたグレイ。 気兼ねなく使える、練習刀として、送られた妹からのプレゼント。 しかし、グレイにとって、最早かけがえのないもの。 グレイの身長合わされた、長刀。 グレイは、この刀を大切に使つてゐるのであつた。

洞窟のは、一本道で歩きやすかつた。 何処に辿り着くのか、考へてたら光が見えてきた。 光が見えたグレイは、走つて光の先へ

向かった。そこに見えたのは、町だった。

「何だここは？ 町じゃないか。」

光の先は、シルバー家の近くの町よりも大きく、人の声が絶えない賑やかな町。上には、太陽のように輝く光があり。草や木、川も流れていたのだ。呆然とその光景を見ていたら、巡回中の騎士に見つかってしまった。

「怪しいやつかい！ その女を捕まえる。」

一人の騎士が、仲間を呼び、地面に押さえつけて、グレイを取り押さえた。

「なんなんだ！ あんた等は。いきなりこんな事するなんて。」

「貴様吸血鬼だな。残念だがこの場所を知られたからには、生かしては、介さない。」

「そんな嘘だろ。誰にも言わないから、離してくれ。」

「我らの国の情報を漏らさない為、死んでもらう。」

「吸血鬼を牢に運べ。そいつの持ち物は、司祭殿に渡しに行く。」

「

口を挿む間も無く、グレイは、大きい石造りの建物に連れられ、地下牢に入れられた。しかも入れる途中でグレイの服は、破られ。刀は、持つてかれ。両手、両足を縛られ。目隠しをされた。

最早、喋る事しか今は、できない状況なのだった。

「出せおり！ 外れないと殺すぞ。」

あまりの出来事に暴言を浴びせるグレイ。 そんなグレイの様子を先ほど騎士と一緒に司祭が見に来た。

「司祭殿。 いやつが先ほど報告しました、吸血鬼の女でござります。」

「ほーお これが吸血鬼か。 先ほどから女らしからぬ暴言。 酷いな。 今は、食料の調達をしに国外へ出てるからな、これの処刑は、戻られた後、行うこととする。 いいな。」

「了解しました。 あと司祭殿、こちらが吸血鬼の持ち物になります。 恐らく武器だと思われます。 いかがなさいますか？」

「見たことも無い武器だな。 こんな細い剣で使えるのか？ 恐らく安物だろ。 ポミにして、捨ててしまいなさい。」

「了解しました。」

グレイは、今会話を聞いて怒りが頂点に達した。 大切にしていた物を「ポミ」呼ばわり。 確実に殺すと決まった瞬間だった。

「司祭、貴様の名前はなんだ。」

「私は、ホワイトドリラ・コン様に仕える、アルバス神殿の司祭。スケー・ベルガだ。 死に行く前に覚えおけ。」

汚らわしい物でも見るかのように司祭達は、立ち去った。グレイは、その声を脳みそに刻む為に黙つたまま、牢屋に入るのであった。

時は戻り、グレイの落ちた穴の前にいるカテナ。落ちたグレイの後を追う為、魔力で鎖を操って、少し離れた木に巻きつけていた。

「よし。 それじゃ～降りますか。」

カテナの鎖は、自由自在に長さを変えられ自由自在である。そして、素手のグレイが攻撃しても、耐えられる強度を誇る物。寸やそつとで壊れ無い用に出来てる。

「すこしく深いわねえ。 生きてるかしり。」

グレイがたまたま落ちた穴を降りながら不安な面持ちで、降りるカテナ。まだ、グレイが酷い事になつてるとも知らずに。

「グレイも調子悪いし。 大丈夫かな～ もしかして、生き埋め状態になつてたりしてえ。」

穴の下が見えてきたカテナ。上からだいぶ降りたのか、辺りが暗くなり始めた。カテナは、そろそろ見えなくなるので魔法を使い明るくした。

「やつと下まで付いた。 全部埋もれてるし。 地面でも掘るか。

それだと、グレイの居場所をダウジングで探して……こっちか。」

ダウジングの示した先を見つめカテナは、鎖に魔力を込め、示した方向に鎖を突き刺した。刺さった地面は、大人の人間を入れるサイズの穴が開き、グレイを助ける為、進むのだった。

下に向かうように暫く掘り続けたら、急に光が差し始めた。穴に顔を近づけると草木が整えられたとても綺麗な場所が見えた。

暫く観察し、地面との距離を考えるカテナ。高い位置からどう降りるか考え。

「決めた。」

降り方を決めたのか、穴から飛び降りる。暫く落下した後、天井の壁に鎖を突き刺しゅっくり下りた。

地面に着地した後、周りを警戒し、人が来るのが分かり、物陰に隠れたカテナ。直ぐに騎士たちが何人か、現れたのだ。

「上に穴が開いてるぞ。」

「あの吸血鬼の女の仲間かもしけないな。」

「まだ近くにいる筈だ。見つけたら、あの吸血鬼と一緒に牢にぶち込むぞ。」

「「「ハー」」」

なにやら雲行きの怪しい話をする騎士たちを聞いた。その場から速やかに撤収する力テナ。

「グレイ捉まつたのね。それでも助ける前にまずは、情報収集かしら。」

密かに怒り覚える力テナ。速く助けたい気持ちを押し殺し、冷静に判断をするのであつた。

## アカシックコード

牢にいるグレイを助ける為、情報収集するカテナ。人に見つからないよう町の中を移動していた。

「なんとかして助けたいけど。この服は、目立つわね。」

シスター服を着ているカテナは、町の竜人族の人達の服装と余りにも違い目立つ服装だ。何とか目立たないように行動をしたいのでどこかで服を調達しようとを考えた。

「お！ 一度いい所であるじゃない。」

カテナが見つけたのは、一人沢山の荷物をのせて荷車押す騎士の姿だ。カテナの目には、日常できた、生ゴミや割れた壺等を運んでいた。

暫く隠れながら、後を付いて行き、大きな穴が空いた所に荷車の荷物を捨てようとしていた。作業に集中していた騎士をカテナは、背後から騎士をゴミの穴に落とした。勢いよく鎖を騎士の頭に投げつけ。

「パン！」

すがすがしい音を奏でてくれたのだ。その後カテナは、ゴミ捨て場に降りて、騎士を探した。見つけた騎士は、気絶していた。鎧を剥がして鎖で縛り、騎士を起こし始めた。

「おきる。おきるたら オーをーる。」

声を掛けながら顔を叩くカテナ。何度やつてると騎士は、目を覚ました。

「う・・うえ。な・何だ? 何で私は縛られてる。いつたい誰が?」

「やつと起きてくれた。ふふふ 今から私に協力して欲しいの。」

「ふ・ふざけるな!。なぜ、私がお前に協力しなければならないのだ。」

「別に無理して協力しなくとも構わないけどさあ? 他にも人は沢山いるし。ただ・・・ねえ? 死より辛いことになるよ。」

「はつ はつたりだ。お前みたいな女が何ができる!」

「そう・・・それはそれは残念だわ。 そんなに知りたいのならやるしかないわね。」

カテナは、無表情な顔をしながら、呪文を唱えた。

「起源は闇 隣人は太陽 歴史が刻まれし扉を開け 我に鍵の力を賜われよ。」

呪文が終えると、左手から黒い影が現れ、騎士の近くに寄り、見下ろした後、左手を騎士に刺した。

殺されたると思い、騎士が目を瞑つた。しかし一向に痛みがこないで、恐る恐る目を開けると。赤い紐を一本持っていた。騎士が何をされたのか分からぬからカテナに聞いた。

「いつたいなにを俺にした。 さつき黒い左手に殴られたと思つたが？」

騎士の言葉を聞いたカテナは、紐を擦るように触つながら先ほどより楽しそうに喋りだした。

「貴方の名前は、ザボス・ハドソン。 1月3日生まれ。 隨分忙しい時期に生まれたのね貴方。 騎士になつたのは、10歳の頃ね。 平民なのに戦闘が得意お陰か、騎士まで昇りつめた。 今は、多少雑用が多い行けどそこらの平民よりは、安定した収入。 幼馴染のシータちゃんと結婚して、子宝に恵まれ。 長女のアンナちゃんが生まれた。 シータちゃんと長女のアンナちゃんは、結構可愛いいじゃない。 今は、北側の家に住んで、幸せな家庭を築いているか・・・」

淡々と喋られた言葉に驚愕の色を表すザボス。 言葉を聽くたびに、身体に変な力が入つてゐるようだ。

「今は、家で帰りを待つ妻と娘。 運悪く炎が空から降つてくるかも知れないかもね アハハハハ。 やだ 怖い～」

その言葉を聴いた瞬間、絶えられなくなり、泣きながら懇願した。

「頼む。 家族には、なにもしないでくれ、お願ひだ。」

「どうしたの急に泣き出して？　あつ忘れてた。今、私は貴方に協力をお願いしていたんだ。協力していただけます。ザボスさん」

「協力させてください。お願ひします。」

頭を擦りながら協力をするといったザボス。落ち着くまで、時間が掛かり暫くゴミ捨て場に一人はいたのだった。暫く落ち着かせる為カテナは、ゴミ眺めていた。色々捨ててあると思いながら目を動かしていると、見覚えのある物を発見した。それは、グレイの長刀だった。

「あいつ・・・今これなくて、悲しんでいるだろうな・・・私が持つよといつても、嫌がってたし、速く届けてあげなくちゃね。」

改めて、助けだす決意をするカテナ。時間が経ち落ち着いたザボスに指示をだした。

「まず最初に吸血鬼の女の子を助け出すから。牢屋にいくわよ。それから、一般的な服を持ってきて頂戴。それじゃお願い。」

「分かった。直ぐに持つてくれる。」

「あつ そうそう5分して服を持つてこれなかつたら、私は此処にいなかからそのつもりでお願いね」

「ふん。1分で戻つてくる。心配するな。」

その言葉に偽りなく。肩で息した状態で戻つて来たサボス。

その服に着替え一人は、直ぐに牢屋に向かつた。

暗く、異臭の漂つ、冷たい牢屋。グレイが捕まつてから数刻か過ぎようとした。田を塞がれ、両手両足を縛られたグレイの状況は、酷いものだった。拳句の果てに、服も破かれてしまい、現在は、裸でいた。此処に来る前から血を摂取せずに体力無い状態でこの有様。グレイの体調の悪さが、悪化していくのである。

「へっくしゅん！ あ～調子悪。」のまじやオカシクなるな。  
・・・

「のまま待つても悪戯に時間が過ぎてしまつ為、脱出方法を考えるグレイ。何かないかなと思いながら牢屋の異臭に眉間に眉毛をよせて、絶えるのである。

暫くし、牢屋の聞く音がした。

「やはり中々良い女じやないか。私の趣味に合つな、これなら、楽しめそうだな。」

下卑た声が、牢屋に広がつた。恐らく看守か、騎士のどれかと思ひグレイは、威圧しながら声を出した。

「何しに来た。此処から出してくれるのか？ それならお前の命は、助けてやる。半殺しだけどな。」

そんな言葉を聞いた来訪者は、グレイの田隠しを外し、だらしなく涎をたらしながらいつ告げた。

「今からお前で遊ぶんだ。 楽しませてくれよ。」

田の前にいた男は、騎士だったようだ。 霧囲氣でわかつた。  
鎧を着ていながら顔ですぐにわかつた。 来た理由は、恐らく今の身体（女）田当てだと結論付けたグレイ。 呆れ顔を見せながら騎士に視線を向けてると牢屋中に置いてあるバケツの方に騎士は、向かつた。

バケツは、普段囚人の身体の汚れを落とすか排泄用の為、用意されたものである。

騎士は、バケツを掴み、グレイに向かつて水をかけ始めた。

グレイに掛かるや否や、蒸発するような音をたてた。 グレイは、激痛に顔を歪めながら、悲鳴を上げた。 身体は、思うように動けない為、痛みを耐えることが出来ないでいるのだ。 そんな悲鳴を聞いた騎士の反応は、思った以上の反応だったのか何度も水を掛け続け悲鳴を聞く度に下卑た笑いをするのである。

グレイの牢屋にある水を使い切つた頃、グレイからは、悲鳴も聞こえない状態であった。

身体は、赤く焼け爛れた後があり、傷口から酷い異臭を放つた。  
騎士は、水を掛け終り悲鳴もなくなつたのでご満悦の様子。 後は、遣るだけであった。 騎士は、グレイの今までの悲鳴が相当良かつたのか最早盛りの猿状態だ。

「泣き叫びもしなくなつたし……そろそろいただきますか」

グレイの両手両足を縛つて拘束具を外し、小さな身体抱きかか

えた時、虚ろな顔をしたグレイは、騎士の首を大鎌で飛ばした。

辺り一面が血に染まり、首から出る血を飲み始めた。グレイの身体は、紅の色に染まり、先ほど怪我した身体は、再生を始めた。

血が固まり、食べ飽きたのか？立ち上がりながら大鎌取り出し鉄柵を切り倒し、虚ろな眼でどこかへ歩き始めた。

捕まつた時に外れ無くそのまま右手の薬指にはめていた指輪。同じ右手の甲に契約時のローン文字がそこには、消えていたのである。

その頃カテナは、神殿地下の牢に捕まつてゐるグレイを助ける為、ザボスと一緒に向かっていた。

「ねえ。あとどれぐらいで着くの？」

「あと一〇分ぐらいだろ。そんなに慌ててどうした。」

急に慌てだしたカテナ。先ほどから指輪で感知していた生命力が無くなってしまったからである。もしかして処刑が行われたと思ひ、ザボスに捕まつてゐる吸血鬼との関係から説明をした。

「そんな事がある筈ないがな。現在食料調達部隊が此処から離れてゐるせいで、人手不足だ。それに処刑ほどの在任は滅多に出ないから、大々的に行つと上官から私は、聞いたのだが・・・」

「それじゃ生命力の反応は、どうなってるのよ？ 全く無いなんて可笑しいわよ！」

「しかし、やつきの話を聞いた限りでは、手の甲の印が消えないのが変だろ。」

今現在、カテナのルーン文字は消えでは、いないのである。消えてないので生きてるとは思っていても、生命力を感じないので、危険な状態だと思つてしまふのであった。

「だから急いでるじゃない。速く行かないとグレイが死んじゃうよ。」

ザボスに言つてもしかたが無いが言わずには、居られないカテナである。我慢の限界が近づいて来た辺りで、神殿の前まで来たのであつた。

「此処がホワイトドリゴンを祀る、アルバス神殿だ。正面入り口は、警備が居るので、裏から行くぞ。」

ザボスが裏口に行こうとしていた時、神殿の正面から凄まじい血の匂いが漂ってきた。その匂いに気づいた一人は、正面みる。中から慌てて逃げ出す騎士たちだったのである。

「いったい何だあの化物は？」

「そんなの俺が知るか！ 速く逃げないと死ぬぞマジで。」

「でもあそこには、姫巫女さが祭壇でお祈り中だぞー。」

「なら、お前が助けに行け。俺は此処から逃げる。」

騒ぎながら逃げ出す騎士達。警備の職務を放棄して逃げ出す姿は、情けないものであった。逃げ出す騎士たちが、通り過ぎて辺りでザボスは、喋りだした。

「かなり大変な事になつてゐるな。カテナは、中に入るのか？」

「私が行かないで、誰がグレイを迎えていくの。」

「確かに・・・」

含み笑いをしながらザボスは、腰に下げていた、バルディッシュュを掴みこゝつ告げた。

「カテナ！ 我ら誇り高き騎士を見くびるなよ。先ほど逃げ出したクズども一緒にするな。姫巫女様に危険が所持たら、我らは迷わず剣を取りその敵を討ち滅ぼす物になるぞ。」

そういう捨てて、神殿に向かつたザボス。以外な一面を見たカテナは、やはり思う。初めて会つた時にサボスの歴史を覗いていたが、それだけでその人を理解するのは、無理だということを。そして、気持ちを切り替え、ザボスの後を追つのであつた。

神殿の中は、酷い匂いだつた。辺り一面が血の跡があり、首を飛ばされた者が沢山いた。険しい表情をしながら、後ろに付いてくるカテナにザボスは、言つた。

「恐らく、此処の道を真直ぐ進んだ所の祭壇に姫巫女様がいらっしゃつ

しゃる。 急いでいくぞ！」

険しい表情で言ったサボス。 仲間が無残に首を飛ばされた光景見て、怒っているようだ。 その中には、親しい者達も居たのだろう。 急ぎ祭壇に向かう一人。 二人が祭壇で見た光景は、最後の騎士が切り殺されたところで付いたのだ。

祭壇の近くに、赤く血塗られた服を着た少女が一人（姫巫女）。 先ほど切り飛ばした騎士の首元を貪る用に血を吸うグレイが居たのだ。

その光景に一人は、驚愕していた。 サボスは、上官から今回捕まえた、吸血鬼の話を聞いていたのだ。 その上官が言うには、「小さい女だが、色白の長い銀髪で綺麗だつた。」 上官は、悲しそうに「まだ若いのになんで此処に・・・来なければ死なずに済んだ命を・・・」 しかし、目の前に居る少女は、銀髪の長い髪だが所々紅に染まり、白い身体も血で染まっていた。

姫巫女は、悲しい顔をしながら、血塗られたグレイに話掛けた。

「どうして、貴女は泣いているのですか？」

姫巫女の言葉に一人は、驚いた。 背中しか見えていなかせいか、グレイが泣いているのに気がつかないでいた。

涙の粒をたらしているが、表情の虚ろなグレイは、大鎌をまた何処からか出し、姫巫女に近づく、切り掛かった。

先に反応したのは、カテナ。 鎖で捕らえようとしたが、大鎌に弾かれた。 鎖を放たれた方に向き直り、カテナを見た。 カテナ

に振り向いた顔。それは、出会った頃のグレイとは、まるで別人みたいだつた。

「暫く見ない間に血なまぐさくなつたわねえ。どうしたのかしら？」

「・・・・・」

「無視ですか？　へえ、良い度胸じゃない。面白すぎて、私の頭が可笑しくなつたじゃない。そうね、決めた。あなたの頭を冷やしてあげる。」

余りに変わり過ぎてしまい、怒るカテナ。何より許せないのが、契約の印が消えていたのである。原因が分からぬ今、取り合えず戦うのであつた。

「あんたに審判をくだす！」

そんなカテナ、グレイを見ていた立会い者一人（姫巫女・サボス）。吸血鬼とCHAIN JUDGMENT継承者の死闘が始まつとしていた。

## 神器アトナイ

カテナとグレイの戦いが始まった。お互い一步も引かず、攻撃をするのであった。カテナは、クロスサクス（十字架の剣）で斬りつけ、怯んだ隙に鎖で捕らえようとしていたのだ。

「いい加減正気に戻りなさいよアンタ！」

何度か声を掛けているが、なかなか返事が無く、カテナの独り言の用で空しかつた。

ギリギリの所で避けあう一人。まるでダンスをしているかのように斬り会っていた。

「」いつら化物か？

「私に言わないでください・・・」んな戦い始めてみました。

サボスと姫巫女は、目の前の光景を呆然と見るのであった。激しい戦いの末、祭壇から神殿の表に出で行つたカテナとグレイ。追いかけようと姫巫女が、行こうとしたらサボスが止めた。

「行かれては危険です。姫巫女様。」

「良いのです。私達の人のせいで、恐らく彼女がおかしくなったのですから・・・私は見届ける義務があります。」

なにを言つても無駄と悟つたサボス。姫巫女の強固な意志に負け。覚悟をした。

「分かりました。アルバス神殿騎士ザボス・ハドソン。この命、姫巫女様についていきます。しかし万が一私が死にましたら、姫巫女様。絶対にお逃げください。姫巫女様は、この国に必要不可欠です どうかお願ひします。」

「分かりました。騎士ハドソン。私の護衛お願ひします。」

行くことが決まった後、二人は、グレイとカテナの跡を追つた。

その頃、表に出たカテナとグレイ。カテナは、大鎌をクロスサクスで弾き、グレイの顔面に目掛けて蹴りを入れた。しかしそれを片手で受け止め、カテナを神殿の壁に投げつける。

壁に上手く着地し、次の攻撃に移るカテナ。

カテナは、攻撃の一撃は、グレイに比べ軽い方で、手数は、圧倒的に多いタイプ。それに引き換え、グレイは、大鎌を武器として使っていた為、どうしても大降りになってしまい、カテナに攻撃が届かないものであった。そして、段々と掠り傷が出来始めていたのだ。

そんな戦いの中、グレイに向かつてカテナが疑問をぶつけた。

「あんたグレイじゃないわね。 てつ言つても身体はグレイだね。私が着けた指輪があるし・・・（良かつた壊されてない） いつたいグレイの身体で、何してるの！ 好き勝手やっていいのは、私だけだからね。」

その問いかけに反応したのかグレイが笑い出した。　その光景は、無邪気に笑う少女の姿だった。

グレイが笑つた後、空を見上げながら、空に大鎌を高く投げた。　その本数は、13本。　最初に投げた大鎌から順番に地面に突き刺さり、円を描いてた。　そして、最後の一本がグレイの手に戻つてきた瞬間、黒い円の壁が、グレイの周りを覆つた。

そして、黒のコートを着た者がグレイの身体を抱き抱えていた。

「さつきまでグレイに居た正体が貴方？　随分あつさり出ってきたじゃない。」

黒いコートの者に向かつて、若干怒り気味に言った。　その言葉に対する反応は、無く。　寝ているグレイを優しく抱えながら、草の生えた所に持つて行き、着ていたコートを脱いで、グレイに着させたのである。

黒のコートを着てた時に見えない顔と身体が、そこで初めて露出した。　その中には、侍女服を着、カーナと同じ身長のぐらいの女が居た。

侍女服の女が、優しくグレイを介抱したことに驚き、目を見開くカーナ。　女が何なのか疑問に思つた時、女が喋りだした。

「始めてまして。　私、現継承者。　サングレイス・シルバー様の神器（大鎌）アトナイと申します。　僭越ながら主に害をなす者達を掃除させていただきました。」

それは、とても生き物に出せる声ではなく、とても冷たく放された、ソプラノの声であった。

「つきまして。 C H A I N J U D G M E N T 繙承者、 カテナ・ハーン様。 主の審を成すものですか？」

名前を呼ばれたあと、一礼したアトナイ。 最後に疑問を投げかけられて、凍るカテナ。 カテナの考へてることは、大鎌（神の悪戯）の神器。 アトナイの想像絶するオーラが凄まじい力を放っていた。

そして、アトナイに黒いコートを着させてもらい、草の生えた地面にスヤスヤと眠っていたのが見えたカテナ。 心の中で、（寝てないで、さつさと起きて私を助けなさい）と叫ぶカテナであった。

## 話せば解る。

果報は寝て待て。昔の人は良く言ったのかな？でも今の私は、時間が無い。いや・・・これは、絶対時が解決してくれない問題だな。

神器事、アトナイさん。なかなかの美人だ。侍女服でこの人の美人が台無しな様な気がする。あつ！でもでも、好き者なら好感度抜群なのかな？・・・

アトナイから妙な質問のせいで、少々混乱気味のカテナ。先程の「つきまして。CHAIN JUDGMENT継承者、力テナ・ハーン様。主の害を成すものですか？」がとても衝撃的であつたのである。

意を決して、質問するアテナ。どうやら、時間が解決してくれないと悟ったようであつた。

「すみません。貴女の言つている意味が分からないのですが？」

なんで、私がこんなの相手にしなきやいけないのよ。ぐーたら寝てないで助けなさいよーそこの吸血鬼。何笑顔でコートに丸まつてくの字で寝ているのよー

黒いコートで気持ちよさそうに寝ているグレイに悪態を付くカーナ。アトナイを怒らせたくは無く。なにが地雷で怒るのか不明である為、緊張しまくりだった。

しかもグレイの身体の中にいた時よりも、全然違うじゃない。

あんなの反則よ反則！ それになんで、グレイだけあんなに主人思  
いな、神器に恵まれる訳？ 私の神器は、鎖事態は、全然文句もな  
い。 むしろあの大鎌よりは、全然能力的に強いと思うし、私は好  
きだ。 でも私は憑き物は、話にならないぐらい使いえない。 正  
直もう二度と会いたく無いわね。

「ハーン様。 私は、主に憑いてからの事は、全て把握しております。 そして、主が血が足りない時にハーン様が主を御心配になつていていたことも承知します。」

虚ろな顔をしながら説明し始めたアトナイ。 カテナがグレイの事を身を案じていたのを嬉しく思つているのでここまで、喋つてくれたようだ。

「ですが、高々主の『ミ』を片づけたぐらいでなぜ？ 主を傷つけるのでしょうか？ あの『ミ』共が主に行つた事をこの場で説明致しましょうか？」

若干殺氣が見え隠れしたカテナ。 長旅及び戦闘により、そろそろ限界に近いので、このさ殺氣は、かなりしんどいのであった。

何？あれ・・・かなりグレイに依存し過ぎじゃない。 あと最初の方に血が足りなかつたて、言つてたわね。 だから調子悪かつたのか・・・悪いことしてしたな・・・後で謝るか。 それにグレイにいつたい何があったのか聞くか。

気乗りしない話であつたがグレイが何をされたのか、気になる力テナ。 一応聞いてみる事にしたのであつた。

「あの、アミ共は、この地に着くなり。主を捕え、全てを剥ぎ取り、牢に容れ、天津さえ犯そうとしたのです。普段の状態なら、主の手で一捻りでしょ。しかし、血の力が低い時に、手足を縛られ、水を掛けられれば意識が飛ぶのも無理もありません。あの時の主の体は、酷い火傷でしたから。」

全てを見ていたアトナイ。グレイの悲惨な光景を目の当たりにし、彼女が何もしない筈がない。しかし、必死の呼びかけも届かないでいたらとうとう限界で、意識が飛んだグレイ。

その瞬間、アトナイの堪忍袋の緒が切れたのであった。それは、相手にも自分にも向けた怒りであった。それが良かつたのか・・・・それとも死を彷徨つたお蔭なのか分からぬが、グレイを助け出すことに成功したのである。

「私もあの時ばかりは、私を許せない時でした。何もできない虚しさ。ここまで無力に感じたことは、一度もありませんでした。そのせいが、つい我を忘れてしまし、ハーン様には、多大なご迷惑をお掛けしました。その件に関しては、深く反省しております。」

お辞儀をするアトナイ。彼女の誠心誠意の言葉が届いたカテナ。呼び慣れない名前のせいかこそばゆいのであつた。

「分かった。グレイは、絶対に傷付けない。それに次に血が足りなくなつたら、私の血を吸わすから、どうかその怒りを静めてください。神器アトナイ殿。」

「本当ですか？ それは、ありがとうございます。 本当は、私が血を分けてあげたいのですが、私の源は、主の一部である為、叶わないでの助かります。」

今までに無い、いい笑顔のアトナイ。 どうやら彼女が怒ると、無表情になるのであった。

「それと・・そのハーン様は、止めて頂こうかしら。 貴女の事も呼び捨てにアトナイにするから、私の事は、カテナでお願いね。」

「承知しました。」

やつといい方向に進み始めたカテナ。 その表情に余裕が生まれてきたのであった。

「所でグレイの様態は、大丈夫？」

「はい。 先程大量に血を頂き、主の傷は癒えてました。 明日には、お目覚めになると思います。 私が主の誠心世界に様子を見に行つた際は、のんびり本を読んでもましたから。」

何とも生ぬるい話をし出したアトナイ。 今の一言で、カテナの限界みえ、その場に倒れたのであった。

なんなのあいつ・・・ 人騒がせにも程があるじゃない。

「いかがなさいましたか？ お顔に疲れが見えますが・・・」

その原因は、「あなたも1枚どころか6、7枚かんでます。」と声を大にして言いたいのであった。

一見落着とカテナが思いきや、第三者の足音が聞こえたのであつた。数は、500人に見える。こちらの神殿の広場に向かつてくるのであつた。一つ、趣味の悪い王冠みたいな爺さんを担いできたのである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7731y/>

---

CHAIN JUDGMENT

2011年11月29日20時55分発行